

まちづくりの思想 (1)

「まちづくり」は可能なのか？

京都大学大学院教授 藤井聡

「まちづくり」は、今全国で切実に求められている。

その背景には、全国各地の「まち」が疲弊していているという現状がある。

今、30代や40代以上の方々なら、慣れ親しんだ自分の生まれ育った街や、よく遊びに行った街、中学や高校、大学で通った街々が、例えば1980年代や90年代には、今よりももっと「元気」だったのに、今となつては、本当に疲弊してしまつて、かつての街の賑わいがなくなつてしまつた———という思いをお持ちの方は少なくないのではないかと思う。

そして、そんな悲しい街の代表的な姿が「シャッター街」だ。

昔はたくさんの人々が集う商店街だったのに、人通りは少なくなつてしまひ、多くのお店が店をたたんでシャッターを閉めたままになつてしまふ、そして、そんなシャッターを閉め切つたままの店が徐々に増え、今や、半数以上、場合によっては、大半の店がシャッターを閉めたままになつてしまつた———そんな商店街の通りが「シャッター街」と呼ばれるものだ。

筆者の故郷でも、ご多分に漏れず「シャッター街」化しつつあるところが至る所にあるし、筆者が今住んでいる地域の商店街も、そんな街に近づきつつあるところがある。そんなシャッター街に赴けば、あるいはそれを今思い出すだけでも、何とも言えず切ない、哀しい気持ちになつてしまふ。

この切ない気持ちは、昔からの友人や、親戚、家族が、大怪我をしたり重い病気をしたりして、昔とは変わり果てた姿になつたのを目にした時の気持に、とても似ているように思うのは、おそらく筆者だけではないだろう。

だから、今、多くの街々で、「まちづくり」が求められているのだろうと思う。

家族が重い病気になつたのを見れば、誰だって、何とか元通りの健康な姿に戻したいと思うだろう。それと同じように、かつていつも通つた街、色々な思い出が宿るその街が、もう一度かつての賑わいを取り戻して欲しい、かつての、あの良く見知つたあの姿を取り戻して欲しい———と、多くの人々が全国の街々で願っているのである。そして、そうした思いがそれぞれの街で重なり合ひ、それぞれの街の願いが全国的な潮流となり、「まちづくり」という言葉が今、現代日本において重要な言葉となり果せてきたのだろうと思う。

いうならば、生まれ育つた「故郷」、あるいは「ふるさと」を思う日本中の人々の思い、さらに言うなら、「故郷」「ふるさと」を失いつつある日本民族の悲痛なこころの叫びが、「まちづくり」の運動に繋がつてきているのである。

———とはいえ、そうやって日本に生まれきた「まちづくり」の潮流が、日本全国のまちまちを瞬く前に変えてしまう程に、巨大なものかと言えば、残念ながら、少なくとも現時点では決してそうではないように思う。

やはり、大多数のシャッター街では店を占める店が増えつつけているし、シャッター街になってしまう商店街は日に日に増えていってしまっている。さらには、今はまだシャッター街にまでは至っていないものの、その予備軍化しつつある商店街は、もっとたくさんある。テナントがもう入らずに、「テナント募集」という看板／張り紙が貼られたシャッター一枚、二枚でもあれば、もうそこは既に、シャッター街の予備軍だ。

さらには、「シャッター街予備軍の予備軍」まで含めれば、その数は、もっと多数に上るだろう。その傾向は、「テナントの質の低下」という形になって現れる。

かつては、高級品を取り扱うお店が並んでいた商店街でも、徐々に、高級品を扱わなくなって、より廉価な商品を扱う店、例えば、100円ショップなどがその代表例であるが、そういう店が徐々に増えていっている商店街も多いことだろうと思う。そう言う流れが見え始めた街は、間違いなく、シャッター街予備軍になりつつあるのである。

つまり、日本全国には、「シャッター街化」を哀しみ、それを何とか回避しようとする流れが近年生まれ、その流れが徐々に大きなものになっていっているとしても、それは、「シャッター街化」を押しとどめる程には、大きなものにはなっていない、というのが実情なのである。

というよりむしろ、実態は、因果の方向は、逆に考えた方が適当だとも言えるだろう。すなわち、全国で「シャッター街化」が大きく進行しつつある中で、その流れに対する反作用として、日本中の人々がそれを哀しみ、何とかしたいという願いが生まれ、それが、「まちづくり」の潮流を生んだのである。言うならば、シャッター街化にたいする、日本民族側のささやかな「摩擦抵抗」が、まちづくりの流れなのである。

そうであるとするなら、シャッター街化の流れなるものは、どうしようもない、仕方の無いことなのだろうか、それは、さながら、人間が誰もが年をとり、老い、あげくに死んでいくことが運命であるように、シャッター街化の流れも、それぞれの街の老いを意味するものであって、不可避のものなのであるか———。

この問いは重大な意味を持つ。

もし、シャッター街化が、絶対に止められるものではなく、かつ、それぞれの街に、一切の希望も無い状況であり、どれだけ努力をしてお店を開いても、客が一人も来ることが絶対に無いということが予め確定しているとするなら、じたばたしても仕方が無いということになるだろう。そもそも、何をやったってお客が来ないことが確定している状況であるなら、お店を続ける努力なんて何の意味も無い。

しかし逆に、そこに何らかの希望が、仮にそれが僅かなものであったとしても存在しているとするなら、そこには「まちづくり」の余地が生まれることとなる。

仮に、一人しか客が来ないということが分かっていたとしても、その客のために何らかの商売を続けることは、全く無意味という訳ではない。無論、顧客が一人しか来ないのなら、それは極めて厳しい状況であることは間違いないとしても、それでもなお、そのまち改善せんとする努力の意義は、決して「皆無」という訳ではなからう。

そうである以上、日本中のほとんど全ての「シャッター街化」が進行しつつある街々において、「まちづくり」を展開する意義は残されていると考える事ができるのである。

日本に於いて、まちづくりは「可能」なのだ。

そうであるとするなら、後は、「それは如何にして可能なのか」を考えねばなるまい。

本連載では、そんな「希望」に向けたまちづくりのあり方について、一つ一つ、考えていきたいと思う。